



小説鯖街道  
1～5話



お笑い歴史小説・コ  
ミック、アニメ原作に  
目録

音川伊奈利





# 目次

小説西寺物語 44 話 空海若狭の鯖寿司を嵯峨天皇に献上へ、鯖街道①小説鯖街道 . . . . .	1
小説西寺物語 45 話 嵯峨天皇へ献上「若狭鯖寿司道中」大成功鯖街道②・小説鯖街道 . . . . .	5
小説西寺物語 46 話空海日本初の新婚旅行... 嵯峨天皇が鯖街道と命名鯖街道③・小説鯖街道 . . . . .	9
小説西寺物語 47 話椿の一言で神護寺都唯一の紅葉の名所に、空海椿の結婚披露宴・小説鯖街道 . . . . .	13
小説西寺物語 48 話 空海従六位文章博士に復活、妻椿御前従六位に鯖街道⑤完・小説鯖街道 . . . . .	18



## 小説西寺物語 44 話 空海若狭の鯖寿司を嵯峨天皇に献上へ、鯖街道①小説鯖街道

小説西寺物語 44 話 空海若狭の鯖寿司を嵯峨天皇に献上へ、鯖街道① 小説鯖街道

空海は都～若狭までの高浜街道の整備と布教に力を入れていたが、2回目の布教の旅に弟子100名を引き連れて高浜にいた。高浜では無住職で漁村にある高浜寺の布教に成功してここを拠点にして西は舞鶴、東は小浜、敦賀に弟子を派遣をして農業指導や農業用水の整備をしていた。高浜漁港では鯖、カレイ、イカの水揚げは若狭湾一だが、なにせ都会である京の都や奈良、難波には遠くて大阪湾や瀬戸内海に水揚げされる魚に負けていた。

それでも鯖の浜焼きや干しカレイ、イカの加工品にして細々と若狭街道から都へと売っていた。これは漁民やその妻たちが背中にかつぎ都までの18里を歩いて行商していた。高浜から都へは高浜街道が便利だが、その頃の街道は整備されてなくて危険な箇所が何ヶ所もあった。さらに過去には山賊の被害もあっていつの間にか漁民からも旅の商人からも忘れられていた。

空海は若狭街道を整備して1級国道並みにした。そして都までには5つの集落があるが、この集落の寺はすべて真言宗の末寺になり私の弟子が住職をしているから雨や嵐に遭遇すれば遠慮せずに寺に駆け込んでほしいと漁民を説得していた。それまでは女性だけでは危険だと夫婦で行商をしていたが、それだと男たちは漁ができなく夫が漁に出れば行商はできなくなる。

そこで空海は女性だけで行商をすることを漁民に提案していた。まず加工して商品化する日にちを漁民で調整して行商に出る日を月に2～3回決める。行商には女性ばかり集めて隊列を組んで都に行く。帰りは高雄神護寺に全員集合してまとまって帰る。また、この行商の隊列の予定日には高浜から都まで1里ごとに地蔵と番屋を置いて僧侶を2名常勤させる。また深夜にかかる峠には神護寺の僧侶が見回りをするからより安全になると漁民を説得していた。

この空海の提案に喜んだのが、若い娘たちで憧れでもある京の都には一生行けないと思っていたからだ。しかも、行商に行けばそれなりの金が入り着物も買えると漁民の妻たちより喜んでた。漁村の男たちも空海を信頼していたのでこの女性だけの行商隊には大賛成していた。こうして女性だけの行商隊の第一陣が高浜を出発したのが813年11月4日だった。

早朝5時に出発した高浜女性行商隊は48名で全員母娘で母親は行商の経験のない娘と組んで24組が参加していたが、高浜街道は初めてということで僧侶10名が先導していた。これより先の高浜街道の各村には女性行商隊が通ることを村の寺の住職が宣伝していたために若い娘の荷物を少しでも軽くしてあげたい気持からか娘の行商から鯖の浜焼きや一汐のカレイ、イカが売れた。

また若者たちは高浜の若い娘を品定めしようと行商隊に群がっていた。若い娘が背たろうている荷物は約30キから40キはあるがこの5ヶ村で半分ほどは売れていた。隊列は深夜になるが月明かりでそんなに歩くには不便を感じなかった。神護寺に着いたのは深夜の4時で寺の宿坊で仮眠をとって朝の8時には出発していた。ここからは都の中心部までは約2里2時間ほどで行商隊はそれぞれのお得意様へ若狭の海産物を母親と2人で売り歩いていた。

24組の母娘はそれぞれのお得意様へ向かうが、もう都では若狭高浜から若い娘が行商に来ることは奈良仏教や比叡山仏教の僧侶の前宣伝で特に若者の間では噂になっていた。当時の娘というのは15歳から19歳ぐらいまででまだ幼さが残っている女性のことだった。これら若狭の娘さんらは色白美人だけでなくよく働き素直な娘が多いと大店の息子の嫁にほしいと店に若狭から行商に来る夫婦の娘をほしい、または若狭の娘を紹介してほしい意味も込めて商品を買ってくれていたという経緯があった。

それがまとめて24名も都に来るといので大店の息子ばかりか庶民の若い男までまだかまだかと待っていた。こんなことで24組の持って来た商品はもう昼前には完売していた。もう商品はなかったものいつも買ってくれていたお得意様へは娘を紹介するがてら挨拶は欠かさなかった。そうなる次行商はいつになるかは誰もが気になるので今日は5日なので次は15日、その次は25日と毎月5の付く日と決まっていた。

この母娘の娘はなにせこの日まで高浜から一步も出ていないのにいきなり都に連れて

こられて大店が軒を連ねる朱雀大路や四条大路の賑やかさに怖さを感じて母親の腕を離さなかった。母親が大店の番頭さんに挨拶しなさいと促されても娘は顔を赤らめて下を向いていた。商売の方も母親が商品の説明と値段の交渉をしても取り囲んだ若者の視線が恥ずかしくて下を向いたままだった。こんなうぶな娘に一目惚れする若者が続出するのは当然で若者たちの間ではこの話が尽きなかった。

女性だけの若狭高浜行商隊は日暮れにはそれぞれ神護寺に集まり少しの仮眠をして夜の九時には高浜へ出発していた。帰りの道中は母親は母親連中と娘は娘ばかり集まり都であった出来事を報告し合って歩いていたので疲れや眠気などは感じている暇はなかった。帰りは荷物が無いので早くて18時間後の6日の午後6時には全員家に帰っていた。

行商隊が高浜に帰ると同時に代表各の母親5名が高浜寺の空海に報告に来ていた。空海は恐縮しながら、

「そんな報告などは明日でいいから早く風呂に入って休んで下さい」

「いえいえ、京までは遠くても18里しかありません。娘たちも仲間と歩き物見遊山気分です。次の行商を楽しみにしています。それに私たちもいつもは亭主と二人だけでなにかと気を使いますが、女性だけのほうが楽しく行商ができます」

「そうか～それは良かった。で、街道は道に迷ったり、危険な場所はなかったかな？」

「はい、迷いそうな場所には「神護寺3里、京4里」と矢印が書いた石碑や案内板があり安心です」

そして私らの母親が留守の間に空海さまに食べていただくとうと若狭で古くから伝わる鯖寿司を作りました。どうか食べて下さいと出された鯖寿司を空海は喜んで食べたが、空海は、

「これは旨いが、鯖は足が早いというが、何か工夫をしているのか？」

「はい、鯖は腐るのが早いので焼いて京に持って行きます。この鯖寿司は水揚げされた新鮮な鯖を一昼夜塩に漬けてその後、水洗いして今度は酢に昆布や鰹節を入れて鯖を漬けます。これだと冬は7日ほど、夏でも3日は持ちます」

鯖寿司の後には寺の台所で焼いたのか、熱々の鯖の塩焼きが出された、空海は脂がしったり落ちる鯖を一口食べると思わず「旨い!」と叫んでいた。その時、空海の頭の中にはこれまでお世話になってきた嵯峨天皇や師匠の最澄、それに西寺の守敏僧都、稻荷神社の伊呂具、松尾神社の酒公にこれらの若狭の鯖寿司と鯖の塩焼きを食わしてやりたいと何か瞬間的に思った。日頃は彼らと私とは思想が違うと思って思い出すことさえはばかっていたのに何故だと自問自答していた。

そこで空海は代表各の母親の松に、  
「松さん、この若狭の鯖寿司と塩鯖焼きを嵯峨天皇に献上したいが、鯖を 100 本ほど譲ってはくれないか？」

「さ、嵯峨天皇... ま、まさか～天皇さまはこんな下々の物をお食べにはなりません」

「いやいや、私は天皇とは飲み友達で天皇の好みは知っている。いつも天皇が旨いというものは私も美味しいと思っている。この鯖寿司も塩鯖焼きも私は天下一品の美味と思ったから天皇もそう思う」

「へえ～～～住職さまが～天皇と友達～へえ～」

へえ～と思わず 5 人の母親は板の間に額をこするほどひれ伏していた。空海は、  
「いやいや、私は天皇でもないしこの高浜寺の住職でしかないが、もし天皇がこの若狭の鯖寿司を食べて一言「旨い!」といえれば若狭の海産物は京の都では高値で飛ぶように売れてこの高浜には「鯖御殿」や「鯖屋敷」がいくつも建つかも分からないが、いかがか？」

松は、  
「それは嬉しい話しですが、この鯖寿司は私の義母の梅さんが作ったものですが、私たち若い母親にはまだ教えていただけません。なんでも塩加減が薄いと半日後にはうじ虫が湧いて食べられません。濃くなれば新鮮味も旨味も風味も消えてしまうそうです。また酢に漬ける時間も早ければ生臭く、長ければ脂も飛んで白くなり見た目も悪くなります。たとえ京で若狭の鯖が売れたとしてもこの鯖寿司には到底なりません」

そこで空海は少し考えてから、  
「それなら梅さんが私の弟子に鯖寿司の作り方を伝授していただけませんか？。私たち神護寺の僧侶は宿坊などの料理のすべてを僧侶が調理しています。その腕は京の一流料亭の花板と同等以上の腕利きです。もちろん先の桓武天皇にも嵯峨天皇にも私どもの僧侶の料理をお召し上がり頂いています。その腕利きの僧侶をさらに選抜して梅さんに預けますから鯖寿司の作り方を伝授してほしい。そしてこれらの僧侶が京の料理人に教えることで若狭の鯖は宮廷料理にも京料理の代表にもなります」

空海は料理の名人級の僧侶 5 人を神護寺から高浜寺に集めて梅さんの鯖寿司の鯖のさばき方から塩加減までを習うことになった。教室は高浜寺の台所だが、梅さんは 75 歳の高齢で梅さんの孫の色白美人の椿を助手として連れてきた。この椿は 19 で小浜の漁民の嫁になったが、嫁入りの年に夫は海で遭難して亡くなっていたが、まだ 22 歳の若さだった。子供がいなかったので実家に戻されて兄の船で水揚げされた魚の加工を浜でしていた。



梅さんと椿は早朝から寺に来て僧侶5人に手取り足取りで教えているが、僧侶たちは元々魚をさばくことは熟しているのもので梅さんが教えるのは塩加減と酢の扱いだった。椿はいつの間にか空海の食事や身の回りの世話をすることになったが、これは梅さんの年の功の悪知恵で孫の椿と空海がいい仲になるのを見越していた。

梅さんの鯖寿司教室も10日が経ち僧侶たちは鯖寿司の作りを伝授されていた。この間に使った鯖は100本、米は二斗を越えてこれらの成果である、鯖寿司を嵯峨天皇に献上する「若狭鯖道中」の日が813年12月5日と決まっていた。この日は高浜女性行商隊の4回目の日で若狭鯖道中の行列にも参加することになった。この日から梅さんはお役を終えて寺には来なくなったが、孫の椿は毎日空海の世話をするために寺に通っていた。

(鯖街道②に続く)

## 小説西寺物語 45 話 嵯峨天皇へ献上「若狭鯖寿司道中」大成功鯖街道②・小説鯖街道

小説西寺物語 45 話 嵯峨天皇へ献上「若狭鯖寿司道中」大成功鯖街道②・京都不粹大学

空海は嵯峨天皇への若狭鯖寿司献上の鯖寿司の数を数えていた。嵯峨天皇への献上とはいうが、やはり朝廷の公卿から貴族にまで食べてほしい。そうなると鯖寿司が何本あっても足りない。そこで高浜漁村の村長の富吉に 12 月 4 日の早朝に水揚げされる鯖の数を聞いていた、富吉は、

「なにせ定置網漁ですから色々な魚が獲れますが、鯖だけの数はまだ分かりません。しかし、過去の経験では高浜漁港全体で約 300 匹前後が平均になります。これは隣村の小浜漁港でも同じ位になります」

「ただ、この時期の鯖は秋サバと言って脂がのって一年でも一番旨い時期になります。女性たちの行商でも京の大店から「鯖の浜焼き」の注文を多く取っていますからこの分を確保しなければなりません」

「そうか～なにせ大掛かりな「若狭鯖寿司献上道中」だから中途半端にはしたくはない」

「そうですね～それなら小浜漁港と提携すればなんとかできます。それに鯖寿司用の鯖と塩鯖焼用の鯖では塩加減が違います。前日の 2、3 日に水揚げれた鯖は塩鯖焼用と浜焼き用にして、4 日の高浜、小浜漁港に水揚げされた鯖はすべて献上の鯖寿司に使えば約 500 本はほぼ確実にになります」

「そか、悪いが富吉さん、小浜漁港と話しをしていただけませんか？」

「はい、それは任して下さい。ただ、小浜の漁民も空海さんが考えた女性行商隊を組織したいが、小浜漁港の寺は奈良仏教の末寺で高浜街道と神護寺を使わせてくれるのかと心配していますか？」

「いやいや、奈良仏教であろうが比叡山仏教であろうが高浜街道は天下の公道です。小浜漁港の女性行商隊列が通る日にはすべての番屋には警備の僧侶を常勤させます。もちろん神護寺の宿坊には誰でも利用できます」

高浜と小浜は同じ若狭湾にある漁港で漁場も同じ場所で定置網の場所も協議して決めていた。それと代々高浜と小浜の娘らが嫁入りする先もこの両村が半分ぐらいを占めて

いるからどの家も両村に親戚があった。そんなことで高浜漁港と小浜漁港が協力して「若狭鯖寿司献上道中」を成功させるための提携がなされた。これでなんとか鯖寿司用の鯖は確保されて 1000 本の鯖寿司の振分を空海は考えていた。

空海は若狭ばかりか越前国そのものを京に売り込もうと考えていた。鯖寿司は若狭だが、鯖寿司の米は越前米の新米、酢と塩は敦賀産、昆布は敦賀湾に水揚げされる北海道産、鯖寿司を包む竹の皮も越前から調達すると決めた。その空海が決めたことを空海の横に座っている椿が書き写していた。椿が書いたものはすぐに本堂に貼られていた。

それを弟子の僧侶が見てそれぞれの分野の僧侶がすぐに行動に出るのが真言宗の修行の一つだった。農村担当の僧侶は鯖寿司 1000 本に使う米の量を調べて真言宗の末寺のある村から米の購買、輸送の段取りまで素早くしていた。また酢と塩、それに松前昆布を買う僧侶はその日のうちに僧侶 5 人組を組織して敦賀に出発していた。

空海は気象学を勉強していたので統計的に見て 12 月 2、3、4 日は天気で漁には支障のないと確信していたが、それはそれとして高浜と小浜の村民を集めて高浜寺で当日の晴天祈願、漁業安全祈願、若狭鯖寿司道中成功祈願の大護摩法要をしていた。この空海の大護摩法要だが、これは村民の願いを護摩木に書いてそれを 100 名の僧侶が読経しながら火に入れるもので空海はその護摩木に書かれた名前を一人一人読み上げていたので火の粉が顔にかかって真っ赤になっていた。このころには空海という住職は比叡山仏教の順位一位の高僧で官営東寺の官主に内定しているばかりか従六位の貴族だった。それに嵯峨天皇とは友達だということが越前国中に知れ渡り高浜と小浜の漁民たちは空海を心から信じているようになっていた。

空海はさらに 2 日から 5 日の若狭鯖寿司道中までの工程を椿に話していた。まず 2、3 日に高浜港と小浜港に水揚げされた鯖は塩鯖用と行商が京に持っていく浜焼きに使う。4 日早朝に水揚げされた鯖は鯖寿司用として塩をして木樽に入れて大八車で午前 10 時までに高浜を出発。京の九常寺に着くのが 20 時間後の 5 日の午前 6 時になるための鯖への塩加減を梅さんと相談して徹底すること。

鯖が到着後すぐに鯖の下処理、鯖を酢に漬ける時間を梅さんと相談して全僧侶に徹底すること。1000 本の鯖寿司となると米を炊く大釜を確保するが、すべて炊くのは無理なら 3 回ぐらいに分ける。最初に朝廷用の鯖寿司 500 本を調理すること。この鯖寿司と焼き塩鯖の 100 本で献上鯖とする。若狭鯖寿司道中の出発は午後 2 時で羅城門から朱雀大路で午後 3 時に大極殿前で朝廷に献上品を納める儀式で終わるが、道中の先頭には空海、弟子 100 名、それに高浜と小浜の女性行商隊も全員参列すること。

九常寺に残った僧侶 200 名は官営西寺貫主守敏僧侶、比叡山仏教最澄、稲荷神社と松尾神社に贈呈する鯖寿司を作る。最後に九条村からの手伝いの女性陣、大釜を抛出してくれた人々へのお礼の鯖寿司を作る。尚、この若狭鯖寿司道中の総予算は 50 貫 (1 貫は銭 1000 文) とすること。これを書いて椿は高浜寺の本堂に貼り、同じ貼り紙を神護寺と九常寺に送った。それぞれの僧侶はこれを見て鯖献上の日まで 20 日しかないが、空海の命令を守る以外の道はなかった。

高浜寺の僧侶 100 名、神護寺の僧侶 200 名は空海の書いた予定表を広げて作戦を練っていた。ただ、当日穫れる鯖の量は流動的で朝廷に献上する鯖寿司 500 本以外は臨機応変とした。また、当日小浜の漁船も高浜港に入港させて浜で塩をして木樽に詰めるが、大八車を 5 台用意して詰めた樽から高浜を出発させれば段取りがいい。九常寺の庭に簡易の調理場を作るなどが決まっていた。その調理場ができたなら予行練習として鯖 100 本を仕入れて高浜港で塩をして予定時間に出発させて九常寺で九条村の女性の手伝いととも本番通りに鯖寿司を作ることも決まっていた。そして練習で作った鯖寿司は九条村の村民が試食することも決まった。

予行練習では鯖寿司の鯖を水洗いしてから 3 枚に下ろすが、中骨と皮を取る工程に時間がかかるので 10 名から 30 人に大幅に増やす。酢に漬ける時間が各自がバラバラで 1 人の料理僧侶に判断を託す。米を炊く工程では西寺の食堂から借りた大釜 3 個は炊きむらはないが、九条村から借りた大釜 7 個には村民それぞれの水加減が異なるために炊きむらがある。また、簡易のかまどに焼べる薪が火力の効率が悪いのか予想より消費するために薪の追加購入。簡易の板場が狭いために効率が悪く時間がかかるので増やす。井戸から板場の間が遠いために不便で時間がかかる。などなど問題点を試しに作った鯖寿司 200 本を九条村の手伝いの女性 50 名と僧侶 200 名で食べながら話し合っていたが、味については誰もが満足していた。

813 年 12 月 4 日の高浜の漁船も小浜の漁船も大漁で鯖も予想以上の 600 匹ほど水揚げされた。高浜小浜女性行商隊も早朝 5 時には京へ出発していた。水揚げされた鯖は予行練習と同じ手順で手際よく塩をして樽詰めされて最後の八車が出発したのも予定通りの 10 時で空海はそれを見届けてから僧侶 100 名とともに京へ向かった。空海のお世話係りの女性である椿は椿の母親と妹の組に同行していたが、背中に背負っている荷物は鯖の浜焼きではなく空海の着替えなどだった。

京の九常寺でも予行練習と同じ手順で鯖寿司作りが始まりこれも予定通りで朝廷に献上する鯖寿司 500 本、塩焼き鯖用の鯖の切身で 100 匹分を 3 台の大八車に積み込み「献

上若狭鯖寿司」と書かれた木札が高々と上げてあった。行列は正装の空海を先頭に僧侶が100名で太鼓を鳴らして歩いていた。そして献上の鯖の大八車が続き、その後に高浜小浜漁港の女性行商隊80名余りが行列をしていた。この女性行商隊はもう朝から行商をしてすべて完売で身軽で半分は若い娘だが、若者たちは見初めた娘を必死で探した娘に拍手を惜しみなく贈っていた。

大極殿の門前では献上の鯖寿司を正面に置いて、左側に僧侶が並び、右側には高浜小浜女性行商隊が並び、大極殿の門が開いて従三位左大臣藤原朋己と若い貴族たち20数名が礼服と烏帽子の凛々しい姿で現れたが、その絵にも書けない雅な姿に娘どころか母親も過呼吸からかドタドタと倒れていた。官女、侍女ら20数名が倒れている母娘に手をかすが、その様子を目の前で見た母娘はその官女、侍女のあまりにもの艶やかさとお香の香りでこれも過呼吸なのかバタバタ倒れていた。その間に空海が左大臣に鯖寿司の目録を手渡して献上の儀式は無事終了していた。

## 小説西寺物語 46 話空海日本初の新婚旅行... 嵯峨天皇が鯖街道と命名鯖街道③・小説鯖街道

小説西寺物語 46 話 空海日本初の新婚旅行... 嵯峨天皇が鯖街道と命名鯖街道③・小説鯖街道

若狭の鯖寿司を朝廷に献上した若狭鯖寿司道中は大極殿前で解散して 100 名の僧侶と若狭高浜小浜女性行商隊は神護寺に引き上げ女性行商隊は少しの仮眠をしてから高浜、小浜に帰る。空海は世話係りの椿と二人で太秦の広隆寺に向かった。この二人は松尾神社の宮司酒公の配慮で広隆寺の貴賓宿坊を一ヶ月ほど借りていた。この一ヶ月というのは東寺南大門前の九常寺の裏庭に空海の宿坊「奥の院」の建立までの仮の宿坊だった。この奥の院に椿が入って空海の世話をする名目だが、これは事実上の空海の妻になり、今回の若狭鯖寿司道中は空海と椿の新婚旅行となっていた。

この奥の院に女性の世話係りを置くというのは比叡山仏教も奈良仏教も事実上認めているからこそ宗派の高僧から各地の末寺の僧侶まで世襲制で寺の跡継ぎが決まっていた。この奥の院の女性のことを僧侶も檀家の人たちも〇〇寺のまたは住職の「奥さま」と呼ぶようになっていた。その空海との新婚旅行の初夜を向かえることになった椿は空海に、「あの高浜寺のおもしろい住職の空海さまが、まさか、日本国を代表する大僧正さまとは椿は信じられません」

「いや～椿のお婆さんの梅さんに孫の椿を嫁にもらってくれるなら若狭で古くから伝わる鯖寿司の極意を伝授すると言われて承知したが、私は椿をひと目見て一目惚れしていた」

「やっぱり梅さんの悪巧みだったのネ、でも、私のような田舎の娘に空海さんのお嫁さんは務まるか心配です」

「いや～私だって 15 歳で四国の山奥から出て来た田舎ものです。お互い田舎者同士仲良く暮らしましょう」

「嬉しい～空海さま～」

この広隆寺の建立時はまだ奈良仏教と比叡山仏教がいがみ合い双方が僧兵 1000 名を組織して宗教戦争が勃発する前夜だった。そんな折に都の洛外の太秦にこの地の先住民で大陸からの渡来人「秦氏」の守り寺として広隆寺の建立が桓武天皇から許されたが、寺

の貫主の僧侶を奈良仏教、比叡山仏教のどちらから誘致しても宗教戦争に加担することになる。

そこで同じ秦氏一族の氏神でもある松尾神社に広隆寺の管理が任されていた。秦氏一族からすればこの広隆寺の貫主にはやはり秦氏を祖先とする僧侶を希望していた。この秦氏を祖先とする僧侶は奈良仏教に多くて比叡山仏教にはいない。その秦氏を祖先に持つ代表的僧侶といえば西寺の守敏僧都になるが、守敏は西寺の官主に決まっていたので貫主がいまま広隆寺は松尾神社の神職と巫女が守っていた。当時は寺と神社との区別もさほどなく同じ一つの宗教団体でしかなかった。ちなみに嵯峨天皇の正妻の橘嘉智子は秦氏の末裔の橘氏、稻荷神社の伊呂具も秦氏の末裔の荷田氏になる。

若狭の鯖寿司と一塩の鯖を献上された嵯峨天皇と公卿や貴族の屋敷ではこの日の夕餼に出されていた。大きな塩鯖の鯖は100本で切身にすれば600~800切れになるが、これが洛中に散らばっている貴族の屋敷で一斉に焼かれたものだから、都中に秋サバの脂が火に落ちていい香りとなり庶民の住んでいる地域にも届いていた。嵯峨天皇は空海から献上された鯖寿司と焼塩鯖に満足したのか?官女に、

「この若狭の鯖は天下一品だが、この鯖はどの街道から来るのか?」

「はい、なんでも空海さまの高雄神護寺の前の高浜街道(周山街道)を整備されて高浜、小浜から運ばれて来ます。今後もこの街道から若狭の鯖が大量に都に運ばれて来るそうです」

「そか、それなら庶民もこんな旨い鯖を食べられるのか?、それなら神護寺前の街道を鯖街道と命名する」

公卿や貴族があまりにも多すぎて家来に官女ら侍女、下級の貴族には若狭鯖寿司道中の噂話や焼き鯖の匂いだけで若狭の鯖を口にすることは出来なかった。貴族でもそうだから大店の主や庶民まで若狭の鯖を食べたいと思うのは人情になる。そこで公卿や貴族の屋敷に出入りしている魚屋に若狭の鯖寿司と塩鯖の注文が殺到していた。

洛中や洛外の魚屋は七条の公設西市場で魚を卸してもらうが、この魚仲買人も殺気立ち若狭高浜、小浜の魚を仕入れるために大八車と番頭や手代を若狭に向かわせた。若狭までの街道は嵯峨天皇が命名した鯖街道が使われ鯖街道は昼夜を問わず賑わったが、この若狭街道には一里ごとに番屋があり番屋の六畳ほどの休憩所では急病や大雨などの避難場所になるなど、空海の弟子が旅人を守ってくれるので女、子供だけでも安心して旅が出来る日本一の1級国道になった。これを一人旅でも空海が見守ってくれるので安心と「同行二人」という言葉が生まれ、空海の信者が鰻登りのごとく増えた。

空海の今までの信者と末寺を布教する武器とは奈良仏教の利権宗教を批判した上で比叡山仏教の「民衆を救い、民衆を幸せにする」ためには比叡山仏教の全僧侶に農業から土木工事、医療までの専門僧侶を育成してその僧侶を貧しい農村に派遣して末寺を増やしてきた数は全国で600寺院を越えていた。つまり、信者のすべては比叡山仏教を信じたものでその比叡山仏教とは最澄そのものだった。

空海はその最澄から独立しようと真言宗を立ち上げたが、最澄の怒りをかって空海は破門になった。空海が全国を駆け巡り布教した600寺院のある農村のすべてが空海より比叡山仏教の最澄を選んでいて、幸い空海は最澄からの破門は解かれたが、残った末寺は九常寺だけで失望から一時は自殺も考えていた。

一方の空海が強烈に批判していた奈良仏教は守敏僧侶の奈良仏教改革が成功して奈良仏教の伝統ある仏教の元々の信者である公卿や貴族の九割方を取り返したものの農村部で弱かったが、守敏は比叡山仏教の根本である「民衆を救い、民衆を幸せにする」を最澄から学び比叡山仏教と同じように全僧侶に専門技術を持たせた。この最澄と守敏を仲良くさせたのは嵯峨天皇であり、もはや空海は正一位、つまり、日本一の仏教教団樹立は夢の夢だと思うのは当然になる。

椿との新婚初夜にこんな私の失敗談を披露して不粋な男だと前置きしてから空海は過去の出来事を椿に話しをしていた。お膳には椿の祖母の梅さんが、丹精込めて作った鯖寿司やカレイの一夜干しが並び二人で酒を飲んでいて、椿はまだ22歳だというのに酒は強くて笑い上戸だった。その椿が、

「空海さまは高浜や小浜の人々にとっては正一位どころか神さまになります。空海さまが若狭で漁民を指導したのと同じことを日本中ですれば空海さまが目標としている日本一の宗教教団などすぐにできます。私もその日本一の空海さまの嫁に恥じない教養を身につけますから安心して民衆を救い、民衆を幸せにして下さい」

「そか、梅さんが椿を嫁にすれば私の夢が叶うと言っていたが、私にすれば梅さんが愛染観音に見える」

「ハハハ...梅さんが観音さん?、私には強欲婆さんにしか見えません」

「明日から一ヶ月もここで暮らすけど、椿はどこか行きたい所はあるか?」

「はい、高雄神護寺の紅葉が見たいです。あの鯖街道から見る高雄溪谷の自然の紅葉は息を呑むほど綺麗で雅です。都の人々は どうして紅葉の素晴らしさがわからないのか椿には不思議でなりません」

「たしかに、梅や桃の名所はあるが、屋敷や寺の庭木になる。雄大な山の自然な高雄神護寺の紅葉か〜いや〜あの神護寺は和気清麻呂の私寺で境内には広大な庭の別荘があったが、その別荘を宿坊料亭にして若狭の新鮮な魚と紅葉狩りの名所にすれば高級貴族の



遊び場にもなるし、庶民も神護寺で紅葉狩りが楽しめる、椿ありがとう」

空海は思いついた日が吉日と早速九常寺の奥の院の建設工事を中止にして宮大工を神護寺に集め料亭への改修突貫工事に入った。当初予定していた椿との新婚生活の場を九常寺でもなく神護寺でもなく宿坊もみじ亭にした。そしてみじ亭の女将には当然ながら椿になる。

## 小説西寺物語 47 話椿の一言で神護寺都唯一の紅葉の名所に、 空海椿の結婚披露宴・小説鯖街道

小説西寺物語 47 話椿の一言で神護寺都唯一の紅葉の名所に、空海椿の結婚披露宴・小説鯖街道

季節は 813 年 12 月 6 日、この秋から冬は暖冬で高雄神護寺の紅葉も色付き始めて見頃は 12 月中旬だと造園が専門の僧侶が空海に説明をしていた。中旬なら 10 日もあるから宿坊もみじ亭の建物と庭園の整備を急がせ 17 日に真言宗本山神護寺の再興大法要を行うと内外に宣言していた。空海の弟子 300 名の内 50 名を当日の朝には高浜、小浜から新鮮な魚が神護寺に届けるための僧侶として派遣。残りの 250 名で宿坊もみじ亭の整備と牛車が本堂まで通れる階段以外の脇道の道路工事となった。

また都から宮大工 50 名、造園師 50 名を呼んで嵯峨天皇が着座する玉座と貴賓室の装備を依頼していた。この旧和気清麻呂の別荘の広大な庭には四季の木々があるが、もみじ以外は他に移植してから高雄山に自生していた樹齢 50～100 年で枝ぶりのいい紅葉を庭に移植していた。空海はこの神護寺再興大法要には嵯峨天皇、橘嘉智子正妻など皇族。攘夷大將軍坂上田村麻呂と幹部武将 5 名、従三位以上の高級貴族 30 名、比叡山仏教の最澄と高弟の高僧 5 名、奈良仏教の守敏と高弟 5 名稻荷神社の伊呂具、松尾神社の酒公など貴賓招待客 80 名に招待状を出していたが、貴賓客以外のお付きの官女、侍女、武士、牛方まで入れるともみじ狩りの客は 500 名を予定していた。

この空海の招待状にいち早く反応したのが、嵯峨天皇で宮中はこの天皇の高雄神護寺行幸には驚いてはいたが、天皇が行幸するとなればどんなに急でも皇族も高級貴族も従うしか道はない。それも 10 日先では天皇や皇族の警備の用意に宮中中が湧きだっていた。そして天皇の行幸の準備をするのは従四位程度の貴族と部下の下級貴族で皇族や高級貴族の牛車の手配、通り道の警備や整備までどの貴族も日頃働いていないのに 17 日の行幸までは徹夜を覚悟をしていた。

若狭高浜、小浜の漁民たちもこの空海の神護寺再興法要を全面的に支援することを漁港組合で決議した。空海がいう嵯峨天皇や皇族、高級貴族たちに若狭の新鮮な魚介類を

食べてもらうというのは最高の名誉で先の若狭鯖寿司道中の成功で若狭の魚介類は高値がついて高浜や小浜の漁港では都からの魚仲買人が大勢押し寄せて漁民ばかりか浜で魚を加工する主婦や高齢者、15歳以下の子供まで総動員した結果貧しい漁村からかなり裕福な漁村に生まれ変わっていた。

ただ、新鮮な魚介類となるとかなりやっかいで越前カニやあわび、さざえなら冬場なら元気なまま神護寺に運べるが、鯛やひらめ、イカやぶりなどは生きたまま都に運ぶことは今まで考えたことはなかった。そこで僧侶50人と高浜、小浜の漁民の役員30人で作戦を練っていた。そこで小浜の村長の種吉が、

「以前、若狭国の国司が鯛の活造りを食べたいというので冬場だったが、大きな木樽に海水を入れて鯛を泳がして小浜から若狭国府(福井)まで25里を25時間かけて運んだことがあるが、その時には5匹の鯛の3匹は無事生きていたが、それから比べると神護寺までは16里で16時間だから鯛は楽にいける」

また別の漁師は、

「聞けば貴賓客にだけ生魚をお出しするというが、その数は80名だそうだ、そうすると活造りの鯛だけでも20匹はいるが、途中で死ぬ鯛も計算に入れなければならない」

種吉は、

「鯛や越前ガニ、伊勢海老、あわび、さざえは網の生簀でも数日は生きているから問題はない。他の魚は定置網の水揚げを夕方にして船に木樽を積んでそのまま陸揚げすれば大抵の魚は生け捕りができる。輸送中に弱かった魚はその場で絞めて血抜きをするので焼き魚や煮付けでも新鮮なままで無駄がない」

一方の椿は広隆寺には空海が手配した元皇族や高級貴族に仕えた侍女10名を雇い椿をどこに出しても通用する貴婦人にする教育を受けていた。これは空海の妻というより10日後に開催される神護寺再興大法要の後には宿坊もみじ亭での嵯峨天皇、皇后を招いての大宴会では空海の妻としてまたもみじ亭の女将として接待するには貴族の習わしごとを知り絶対に失敗は許されないための訓練であった。

椿は10名の専門分野の元侍女がそれこそ歩き方から座り方、箸の上げ下げまで厳しく教育されたが、椿はこれを難なくこなしていた。この合間には呉服商の高島屋から番頭と手代数名が椿の長襦袢から着物羽織10枚の柄選びに採寸、さらに小間物屋からも化粧道具一式持ち込まれ元侍女の化粧係りから宮中の社交貴婦人に相応しい化粧と肌の手入れ、髪型まで特訓していた。椿は生まれてからこの日までは木綿の着物しか着たことがなく、絹の着物と羽織を着ても軽すぎてなにか裸で歩いているかの気分に顔を赤らめていた。この過酷な教育は16日の深夜まで行われて17日当日の早朝に宿坊もみじ亭に

入っても元侍女の10名とともに天皇、皇后、高級貴族の座る場所を確認しながらの訓練は休みなく大法要が終わり、宴会に入る直前まで続けられていた。

16日の夕方5時に高浜を大八車12台に木樽の生簀24個を積み出発した。これには僧侶が50名、高浜、小浜の漁師12名が加わり生簀の魚を管理していたが、定置網から直接魚をすくい船に積んだ木樽に入れたためか弱かった魚は少なかったが、鯛同士が喧嘩して約2割程度は死んだ。予定通りの10時には神護寺に到着して下ごしらえが始まった。大法要が空海、最澄、守敏の読経で始まるが、通常この手の大法要は2~3時間が相場だが、空海は若狭から運ばれた新鮮な魚をより新鮮に食べられるようにと法要を30分に短縮していた。

異様に短い法要が終わり宿坊もみじ亭に案内された貴賓客75名は広大な庭の紅葉に全員、息をするのを忘れるほどの自然の錦絵に感動の声が出ずに拍手で応えていた。庭の裏山の槇尾山の自然な紅葉を借景にしての雄大なもみじの庭には簡易の神楽舞台が設営されて松尾神社と稲荷神社の巫女ら20名が神楽の舞と演奏で貴賓客を出迎えていた。

貴賓客が全員指定された席に着くと予定された時間だが、客は紅葉の余りにも見事な華麗さに見とれて庭園と座敷の間の回遊廊下に座り込み時を忘れていた。だが、新鮮かつ温かい料理の配膳をする裏方をやきもきさせていた。しかし、それは高級貴族らが紅葉の庭園を気に入った証拠だとこの庭を造った造園師と造園専門僧侶らの裏方は反対に大喜びをしていた。

庭園に面した座敷は四部屋あり一番奥の座敷を玉の間として一段高い玉座がある。二の座敷には皇后など従三位以上の公卿や貴族の正妻の女性ばかりの席になり、接客するのは神護寺の若手で選抜された美男子僧侶が担当する。三と四の座敷は貴賓客の男性ばかりで稲荷神社と松尾神社の巫女が接客することになっていた。本来なら四部屋の襖をすべて開放して天皇と皇后は玉座に座り天皇がお言葉を述べる儀式があるが、空海はそれをすべて省き襖は閉めたままで貴賓客が着席すると同時に豪華なお膳が運ばれてそれぞれの座敷の年長者が形ばかりの乾杯で大宴会が開始された。

料理の主役はやはり新鮮魚介の舟盛りでまだピクピク動いている鯛と伊勢海老、越前ガニ、ウニになる。お膳の焼物はあわび、さざえ、寒ブリ、越前ガニで接客役は舟盛りの魚を貴賓客の注文で皿に取っていた。嵯峨天皇は玉座の間には座らず最澄らといつも神泉苑離宮や六条河原離宮で車座での宴会になった。正面には嵯峨天皇、左側には攘夷大將軍坂上田村麻呂、松尾神社宮司酒公、稲荷神社宮司の伊呂具、右側には比叡山仏教

の最澄、奈良仏教守敏、本来は守敏の次の席に空海が座る定位置だったが、天皇と向かい合って座ったのは本日の主催者の空海が座った。その後ろには椿が控えていた。

この玉座の間には天皇の侍女 10 名が両脇で控えていたが、どの侍女も若くて美しく光輝いていた。本来ならこの宴会でも主催者の空海か法要の参列のお礼を述べた後に天皇のお言葉と最澄の乾杯となるが、この簡易的な形式の儀式さえ天皇の意向で省いていた。そして今回は天皇自らこの宴会を進行すると言い出していた。その天皇が侍女に、  
「これこれ、何をしているのだ、椿のお膳を持て…」

すると打ち合わせをしていたのか侍女 5 名が座布団とお膳を持って来て、侍女が空海に椿さまを横に座れるように促し空海を右側に移動させて椿の席を確保していた。椿も空海もこのことを知らされていないためお互い目を合わせていた。そして天皇が、  
「本日は空海と椿の結婚披露宴にご列席して頂きありがとうございます。まずは空海、椿の祝福を祝って乾杯いたしたいと思います」

と、同時に侍女が披露宴招待客に酒を注いで回り、最澄の乾杯の音頭で宴会は始まった。空海も椿もこの天皇の温かい配慮にはお返しする言葉が見つからなかった。

こうして空海と椿の結婚披露宴は始まったか、天皇はこの他喜んだのが、鯛の活造りと越前ガニで好きな酒もそこそこに越前ガニを食べ終わったところに天皇は椿に、

「椿は魚師の娘だと聞いているが、この越前ガニが捕れた若狭の生まれか？」

「はい、私の生まれは若狭ですが、祖父は都のお役人さまと聞いています」

「ほう？、都の役人とは？」

「はい、私の祖母の梅は若い頃、若狭国国司の従五位藤原忠克さまに侍女としてお仕えしていましたが、その梅が忠克さまのお子を宿り、産まれたのが私の母の松になります」

「ほう、忠克か？、忠克はたしかに 20 年ほど前は若狭国の国司だった。今では朝廷の重臣で中納言従三位藤原忠克となったが、椿は忠克の孫姫、松は忠克の姫になる。その梅と松姫は元気なのか？」

「はい、梅は先の若狭鯖寿司献上道中の鯖寿司を監修いたしました。母の松は毎月 5 の付く日に若狭の鯖を担いで都に行商に來ています。本日もこの宴の料理の下働きをしています」

「なに！、中納言忠克の姫が行商、下働き…それは何とかしなければならないが、椿姫は祖父の忠克に会いたいのか？」

「はい、忠克さまにお会いしたく存じます」

天皇はこの大法要には忠克も政府の重鎮の貴賓客として別の座敷には居るが、ここで会わすのが妥当なのかを暫く考えていたが、しかし、孫姫と空海の目出度い披露宴ならいかと判断して侍女に、

「忠克と松姫をここにお連れしなさい」

この椿の話しを空海は初耳で驚いてはいた。椿の祖母の梅が「椿を嫁にもらうと必ずいい事がある」とは言ってはいたが、この事だったのかとなんとなく納得していた。

## 小説西寺物語 48 話 空海従六位文章博士に復活、妻椿御前従六位に鯖街道⑤完・小説鯖街道

小説西寺物語 48 話 空海従六位文章博士に復活、妻椿御前従六位に鯖街道⑤完・小説鯖街道

嵯峨天皇は空海の新妻椿と母親の松を中納言従三位藤原忠克に引き合わようと侍女に忠克と松をここにお連れしなさいと命じていた。侍女は二組に別れて忠克の座敷と松が働いているという神護寺の台所に向った。忠克は同じ宿坊もみじ亭にいるのですぐに天皇の玉の間に天皇と拝謁していた。一方の松を探していた侍女は台所で松姫はどこにいるかと同じ若狭高浜、小浜から手伝いに来ている約 80 名の魚師の女性たちに聞かすが、突然、若くてきらびやかな侍女が台所に入って来たので全員目を丸くしていた。

その女性の一人に、  
「松姫はどこに居られます」

と聞かすが、その聞かれた女性も周りの女性も顔を横に振っている。そこで僧侶を見つけて事情を話したところどうやら椿の母親の松と分かった。侍女は松に再度空海大僧正さまの正妻の椿姫さまの母上かと確認したが、松は、

「正妻?、松はたしかに空海さまのお世話係りですが…」

これを聞いた侍女は松を神護寺の別室に案内して椿の教育係りの元侍女とともに松の着ている木綿の着物を剥ぎ取るようにして裸にしていた。そして松の絹の着物に着替えさせながらも別の侍女は松の髪を結、化粧をしていた。

松はあれよあれよというまに着せ替えられて侍女は松に、  
「今から天皇に拝謁しますが、まず、玉の間に私が先に入りますから松姫は私について来て下さい。私が止まった場所にそのままお座りになって手をついて頭を下げたままにして下さい。すると天皇が、「松、おもてを上げよ」とおっしゃいますから、その時に頭を上げて天皇を見て下さい。さらに天皇が二、三質問をされますが、それに正直に答えて下さい。分からない時は私がすぐ後ろに控えていますから安心して下さい」

一方の忠克は先に天皇から査問を受けていた。天皇は忠克に、  
「若狭国に赴任している折に梅という侍女に忠克の子を宿させたのは事実か?」  
「はい、梅は私の子供を産むために若狭高浜に帰り無事娘を産んだという知らせで私が梅の娘なら松だと命名しました。その後、長岡京から平安京への遷都が急遽決まり私は長岡京に帰らされました。それから5年後に平安京に遷都され私の屋敷が決まり梅を愛妾として都に迎えようと準備していましたが、梅から都へは行けないという返事がありそのままにしています」  
「そか、それなら松を忠克の子と認めるが、本日のこの大法要の主催者の空海の正妻の椿は忠克の孫姫だということを知っているのか?」

忠克は天皇の予期せぬ質問に右側守敏の次に座っている空海を見た。そして左側伊呂具の次に座っている椿を見たが、二人して忠克に深々と頭を下げています。そして椿に、  
「孫姫ということは松の娘になるのか... そういえば梅に良く似ているが、母の松は元氣か?」

その時に侍女に連れられて松姫が玉の間に入り、松は侍女の合図で忠克の左横に座り頭を深々と下げていた。椿は侍女の後ろの豪華な着物を着た女性がまさか母とは思えず2度見をしていた。天皇が松に、  
「松... おもてを上げなさい」  
と、同時に松の後ろに控えていた侍女が松のお尻を指で突いた、それと同時に顔を上げると松にすれば色白で派手な衣装を着た男が座っているしか見えない、その色白男が、  
「松は若狭高浜の梅の娘に間違いはないのか?」  
「はい、梅の一人娘の松になります」  
「そか、では松の父親は梅から誰と聞いている?」  
「はい、都のお役人さまと昔に聞いたことがあります」  
「そか、そちの隣にいる中納言従三位藤原忠克が松の父親になる」

松は恐恐隣に座っている男を見るが、まだ、もう一つ意味が呑み込めず忠克に軽く頭を下げていた。それよりなにより椿は松の変身に驚き、松は椿が竜宮城のお姫さまの様な変身ぶりに驚き二人は顔を見合わせてこの場の父娘の涙の対面の美談など考えずに母娘と衣装や化粧のことを思い切り朝まで語り合いたいと思っていた。しかし、この話しを隣の座敷で聞いていた皇后や左大臣、右大臣の正妻などは涙なしでは語れない朝廷の美談として話がまたまた膨らみ都の町衆までこの椿母娘の物語に涙していた。

こうして空海の神護寺再興大法要というより空海と椿の結婚披露宴は大成功してからは高雄神護寺のもみじ狩りが皇族や貴族まで大流行して宿坊もみじ亭は紅葉ばかりか月見の宴、雪見の宴まで予約が殺到していた。また神護寺前の鯖街道も東北や北陸からの



商人の荷車が昼夜の区別なく都へ年貢や物資を運ぶ国の大動脈となり、橋の掛け替えや峠の整備なども朝廷から金がでるようになったが、そうなればさらに鯖街道は通行量が増えて旅人が神護寺の長い階段を上がりずとも神護寺にお参り出来るお堂と茶店を清滝川をまたぐ高雄橋の街道脇に建てていた。お堂では「同行二人道中安全」のお守りが売られていたが、これは空海が同行して旅の安全を守るという意味として椿が発案したもので、これが京の都を代表するお土産になり茶店、宿坊もみじ亭の儲けとともにこれらの資金で空海は全国から弟子 1000 名を大募集していた。

一方、娘と孫との奇跡と涙の対面をした中納言従三位藤原忠克は朝廷にこの二人を貴族としての官位の申請書を書いていた。朝廷の慣習では貴族の妻は夫より 2 階級下の官位、子は 3 階級下になる。忠克は従三位だから松は正五位で椿は正五位藤原松の子で 3 階級下の従六位になる。この松の正五位は中級貴族の最高位で位階米 (給金) も現在の貨幣価値では 1 億円になり正五位では 200 坪程度の屋敷を構えて家来、侍女など約 30~50 名が雇用できる位階米になる。

高級貴族は従四位からで位階米も跳ね上がり約 3 億円。さらに 1 階級上がる度に倍々に増え従三位の忠克は約 12 億円だが、中納言という役職手当で約 20 億円にもなる。高級貴族にもなると私兵の武士団を 500 名ほどを雇い自分と家族の身を守らなくてはならないための資金としての必要性が位階米にあるために莫大な金になっていた。ただこれらの私兵はしばしば貴族と貴族の権力争いにも使われていた。(葉子の変、応仁の乱)

この二人への官位申請書を書いてはいるが、この貴族からの申請書を決済する役目が中納言の仕事にもなり自分の娘と孫の官位を申請者本人が決済するのはなにかと誤解を生むと忠克は嵯峨天皇に決済を願った。天皇は忠克に、

「それは、分かったが、私は忠克の娘の松に正五位藤原若狭御前、椿には従六位藤原椿御前と命名したいが忠克はどう思う?」

「それは誠に有り難くございます。しかし、空海の正妻が官位従六位で空海が無位ではと若狭御前も椿御前も案じていますが?」

「ささ、それだが、こないだの大法要で比叡山の最澄が私にぼやいていたが…」

と天皇は忠克に胸の内を語っていた。

もみじ亭での宴会では天皇が空海に謝意を表すためになにかの褒美を授けることは朝廷内では常識でそれは空海の官営東寺官主内定の取り消しを解除して再び東寺の官主に内定して従六位の貴族に復活することだったが、これを最澄に告げると最澄は、

「いや~それが、私の高弟 5 人組が官営東寺の官主は比叡山仏教から出すもので空海は一度私から破門されてその破門は解かれたものもはや空海は神護寺が本山で比叡山仏教とは仏教上の敵対関係になる。もし、空海が官営東寺の官主に内定するならば僧兵 1000

名を再び組織して空海を討つとして今回の大法要でも貴賓客として空海から招待されていたが、5人組は空海に抗議するために無断で欠席している」

そこで松尾神社の酒公が、

「比叡山が僧兵を組織すれば奈良仏教も対抗上同じ数だけ僧兵を組織することになる。それに空海も武器を持ち防衛しなければならない。そうなれば三者が偶発的にでも衝突すればどちらも引くに引けなくなり都は宗教戦争の煽りを受けて火の海になる可能性があるが…」

天皇は、

「そか、比叡山はそんなに荒れているのか?最澄」

「はい、世の中が平和になりますと緊張感がなくなり、人間本来が生まれながらに持っている、妬みや嫉妬が湧いてくるようです。朝廷もかなりの間平和が続いていますからここで緊張感を持たなくてはなりません」

「そか、それで最澄はこの後、比叡山に帰るのか?」

その最澄の返事を待たずして稲荷神社の伊呂具は、

「最澄が山に帰れば二度と下りては来られないと思うので山に帰らない方が良い。反逆した高弟というが、比叡山に最澄のような指導者がいなくなるとさらに権力争いが起こり僧兵の組織どころか内部崩壊が起こり自滅する。それまで最澄はゆっくり京見物でもしたら?」

そこで酒公が、

「空海夫婦が10日ほど新婚生活をした広隆寺の貴賓室が空いているので使ったら?」

酒公のこの一言で最澄はこの法要に付いてきた僧侶5人とともに広隆寺に入ることになり、空海の官営東寺の内定は一時保留されていた。

この話を忠克に一通り話した後に天皇は忠克に、

「そなたの孫の椿御前の夫の空海に官位を与えるいい方法はないのか?忠克!」

「ささ、それなら空海は都一の筆の達人と聞いていますが、丁度、文章博士の従六位菅原義春が高齢のために文章博士引退の願いが私に届いていますが、その義春の後釜に空海を採用すれば比叡山の坊主どもも文句のつけようがありません」

「そか、忠克でかした。それなら空海を従六位文章博士に任命する」

こうして空海と従六位椿御前夫婦は夫婦揃って貴族になったが、この夫婦の貴族としての位階米は年5000万円にもなりその金のすべても弟子1000人募集の資金となった。一方の比叡山では伊呂具が予想した通りに内部崩壊が起こり比叡山で修行している約500名の僧侶の内200人が山を下りて最澄が籠もる広隆寺に駆け込んできたが、広隆寺

は比叡山の幹部を批判して山を追われた僧侶の駆け込み寺となっていた。

---

小説鯖街道 1～5話

---

著 音川伊奈利

制作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---